



20xx年。日本。若者を中心に『覚せい剤、大麻、その他の違法ドラッグ、エリマキトカゲごっこ』の浸透率はますます高まっており、それは芸能人やスポーツ選手だけでなく一般の学生も含まれていた。当然、そこには『いわゆる一流大学、一流企業』に在籍する若者も含まれていた。少子化の影響もあり、統計記録だけで見れば『オレ、ドラッグやったことあるよ』率は『うなぎ登り』であった。にほんブログ村。

留学や仕事での海外赴任の最中に、国外で『大麻やハードドラッグ』に汚染されて帰国する者も年齢、性別を問わず『ますます多く』、彼らはネット上で築き上げたネットワークを巧妙に使い国内で私用で使用したり、転売したりしていた。国内のギャングの懐もますます潤っていった。国外のギャングも日本を必要な『市場』として注目していた。密輸の方法もますます巧妙化していった。5月の連休や、夏休み、年末年始の成田空港が日本人でごった返す時期を狙い、それに混じって大勢の『密輸役』が紛れ込んでいたが、ほとんど気付かれなかった。

摘発されて新聞沙汰になるのは『氷山の一角』であり、『芸能人の醜聞』や『新ダイエット方法』の伝播と同じ速度で日本人の間に『覚せい剤、大麻、禁煙パイポ型タバコ』が広まっていった。あらゆるジャンルの日本人がそれらに汚染され始めていた。『タバコ型チョコレート』にヒントを得た『チョコレート型タバコ（しかも板チョコ型）』なんてのも発売されたが、あまりヒットしなかった。

当然、そこには『いわゆるエリート』の若者も含まれており、そんな彼らがドラッグ中毒のまま『国家公務員』なんか目指しちゃったりしちゃったりするから、それはもう面白いことになっていた。『ワライカワセミ（野鳥の名）』も本気で笑っていた。それはもう、笑っていた。ドラッグで『いい感じ』になった常用者達による阿呆な犯罪が後を絶たなかった。

20xx年。日本。ま、そんなこんなで、ドラッグや大麻に汚染された若者はそのまま大人になり、さまざまな職業について。その一方で『芸能人やスポーツ選手』の違法ドラッグ所持、使用に関しては、相変わらず世間の目は厳しくゴシップ誌のいいネタにされていた。芸能人に言わせれば『お前らに言われたくないわ。』である。ネタと言えば、にぎり寿司のネタで一番の人気なのは本マグロではなく『高級霜降り和牛』になっていた。ますます日本人の舌は脂質を好むようになっており、例えば春のカツオよりも秋のカツオの方が断然人気であった。それでも表向きは『日本の伝統を大事にしましょう』的な運動が未だに続いていた。政府の出したキャッチコピーは『セイブ ザ トラディション』、、、すでに『発音以外は』日本語ではなかった。

学生時代に大麻や覚せい剤に手を出し、中毒のまま、そのまま政治家になってしまった者達。そしてついに登場『中毒内閣総理大臣』、大麻生次郎（おおあそう じろう *『たいまなまじろう』ではない。）。彼の公約には『違法ドラッグの一部合法化』が含まれていた。一部を合法化することで逆に犯罪率を減らすというオランダの『モノマネ的なタテマエ』であった。法案は異例の高速で可決された。そしてハードドラッグ(コカイン、ヘロイン、アンフェタミン、覚せい剤と呼ばれるその他のもの、など)とソフトドラッグ(ハシシ、マリファナ、なんとかキノコ、など)の国内での定義が決められ、大麻は正式にソフトドラッグに含まれるようになった。まず、医療目的での大麻の栽培、販売が正式に認められ、そしてそれらのソフトドラッグの医療以外の使用も『正式に』合法となった（*18歳以上を対象）。主に政府の許可を受けたコンビニや喫茶店、大手ドラッグストアや専門店で販売された。東京ディズニーランドでの販売を求める声も非常に多かったが、本家ディズニーからの圧力で実現しなかった。しかし、アルバイト従業員がミッキーの着ぐるみを着たまま、紙に巻いた大麻を吸引している姿がしばしば目撃されていた。おかげで彼の動きも異様に陽気であった、、、効果が切れるまでは。効果が切れると、彼がキレた。彼の雇用契約も切れた。

20xx年。この頃になると日本国民の7割は合法、及び違法ドラッグなどに汚染されていたので、忘年会、新年会などの季節になると、それはもう大騒ぎであった。さらに『お花見』の季節はさらに『エライ事』になり、『美しい』桜の下には『醜い』人間達が狂乱の宴を催していた。そして、誰もそれに疑問をいだかなかった。そんな『疑問』を抱こうものなら『アイツは空気が読めない』とか『付き合いが悪い』とか迫害を受けていた。『ク(K)スリをや(Y)らない』人を指す『KY』という差別用語が生まれ、流行語になった。そして、やはり『いい感じ』になった常用者達による阿呆な犯罪が後を絶たなかつた。

それでも『タバコよりは体にいいのだ』とソフトドラッグを擁護する者が国民の大半を占めていた。『健康被害が無いらしい』というだけで『健康を促進するわけではない』という発想ができなくなっていた。脳の活動はますます低下していった。労働意欲も低下。『いい感じ』が終了した後の『鬱』に近い状態、それをごまかすためにまた『クスリ』。また効果がきれて『鬱』。また『クスリ』、、、この循環を繰り返す人間が増加していった。ちなみに私、『鬱』という漢字は『読めるが書けません』。

こんな状況は、中国や韓国の『反日派』の人々にとって『かっこうの日本たたき』のネタであった。しかし、その一方で中国や韓国からの旅行者はますます増え、さらに中国製、韓国製の『廉価ソフトドラッグ』の日本への闇ルートがますます需要を増していた。そして東京はオランダのアムステルダムに続く世界中の若者の観光スポットになった。自動車や家電製品とは別の『メイド・イン・ジャパン』信仰が復活しつつあった。

20xx年。大手製薬会社も本格的にドラッグ事業に乗り出し、製菓会社も乗り出した。ギャングの収入は激減。その現場の従業員の負担は増加したが、コンビニ業界はますます成長。社会の変化に未だについていけない、いや、むしろ無駄なプライドが邪魔をして変化しようとならない百貨店業界はもはや『虫の息』、『風前の灯火』、『日本ビジネス界のニッポニアニッポン(*トキの学名)』。そしてついに登場、自動販売機! それも一万回に一回ぐらい『当たり』が出るヤツ。その自販機にはさらに防犯機能として『ロボット』に変形して『ビートルズのヘルプ』を歌いだす機能がつけられた。

日本人の間では「俺、UFOを見たよ。」と主張する若者が続出。しかし、ほとんどが幻覚であった。『幻覚UFO』を見ている人間の隣りにいる人間が『同じ幻覚UFO』を体験するという『もらい幻覚』という現象が報告されたが、『本物のUFO』にとってはいい迷惑であったという。空に浮かぶUFOに牛が誘拐される様を目撃しても、ドラッグ依存者は「このクスリ、効くなあ〜。」と、牛に向かって手を振るのであった。

そして、当然のごとく、そこに『金の鉱脈』を見つけた日本政府。『ソフトドラッグ』には寛容に、『ハードドラッグ』に関しては(一応、表向きは)ますます厳しく。ついに『ソフトドラッグ』の生産を完全に国で管理する事にした。大麻農場とその加工工場を国内の過疎地域に建設する事が過疎化の抑制、雇用の確保を促し、大半の国民からは支持された。さらに、『日本ソフトドラッグ協会』なる社団法人も設立し、流通の管理、リハビリセンターなどのバックアップを積極的に行った。(※『天下り』先もかなり増えた。)さらに、『ソフトドラッグ』税も導入した。が、しかし、やっぱり『いい感じ』になった常用者達による阿呆な犯罪が後を絶たなかった。国会議員たちも『いい感じ』になっている輩が多かったので、テレビの『国会中継』は『エライ事』になっていた。咳き込んでいる議員がたくさんいた。

『2年』という永田町においては『異例の長期政権』を保った『大麻生（*おおあそう）』内閣であったが、総理の『漫画家』への転身の為解散。その後は2、3ヶ月ごとに総理は交代し（長くても半年）、国際政治における日本の首相の影はますます薄くなり、さらに『次の日本の総理は誰?』というのが賭け事の対象になっていた。国外の新聞における風刺画に登場する日本の首相はいつまでたっても『大麻生次郎』であった。

主に支持者から比較的『中毒性が少ない』と言われていた『ソフトドラッグ』であったが、やはり使用者の基本的な『精神の強さ』が問題であり、常用者の99%ぐらいは『依存』状態に陥った。感情の起伏は激しくなり、欲求不満を常に背負う生活。さらに『ソフトドラッグ』を使用する事によって(酔って?) 人々の『ハードドラッグ』への興味を『ますますかき立てる』結果になっていた。かつて「日本も『中毒性の無い大麻ぐらい』合法にするべきだ。」なんて主張していた人間は皆、この精神の『弱い』人間であったので、このころには完全に『ハードドラッグ』中毒になっており、国内の犯罪は増加、国営リハビリセンターは満員御礼。でも、政府は次の選挙のことで頭がいっぱい。

犯罪『率』はますます増加。（ただ、人口の減少に伴い、犯罪件数はたいして以前と変わらなかった。出てきた数字だけでものごとを判断する偉い人達には『いい言い訳』であった。）そんな犯罪者に対しても『責任能力がどーした、こーした』と未だに盲目的な理想論を展開する『人権団体』。その団体の一つ、『センチネル』の代表者、日系3世、グリーン・マナリ氏(41歳)であったが、自分が『犯罪被害』に遭う事であっさり団体から脱退。そして『死刑』支持団体、『Killing Is Saving Society、略称KISS』を立ち上げた。その団体メンバーが全員『素顔が分からないメイク』を顔にほどこしていたという話はあまりにも有名である。

2xxx年。そのはっきりとした理由は不明だが、地球全体における気候の急激な変化により『大麻』の収穫が激減。世界的に『大麻』価格が高騰した。日本政府の『頼みの綱』であった中国製も中国国内の『闇需要』が高まり、『死亡遊戯』並の価格高騰、フィリピン製も国家指導による『健全国家政策』の下に輸出禁止、オーストラリア産も政府が『増えすぎたクジラとサメ』から『漁場を守る』ことと、『カンガルーの駆除しすぎ』よる地上の生態系の『崩壊』で頭がいっぱいで『それどころではない』、って感じでアウト。

ドラッグによる多幸福感が簡単に得られなくなった事と、ドラッグによる副作用で、日本国民の労働意欲は90%ダウン。酒税、煙草税を下げたが、ドラッグに慣れた国民に対し、アルコールやニコチンは全く効果がなかった。「このままではイカン。」とようやく重い腰をあげた日本政府であったが、出てきた政策は『ドラッグ撲滅』ではなくて、合成麻薬『MOP:マスター・オブ・パペッツ』。

その『MOP』とは、日本政府が大手製薬会社と『東京大学の映画研究会』との共同開発で作成した合成麻薬で、『約10時間の労働をすると、その後に言葉では言い表せない幸福感を得る』というクスリであった。そしてそれは『犯罪集団から没収したハードドラッグ』と共に国内企業に『無料配布』され、従業員には給料と共に『1ヶ月分』のMOPが毎月配布された。

ちなみに、この頃になると煙草の収穫量は、需要の低下もあって、ほとんどゼロに近くなっていた。酒類の需要に関しては、未だに人が集まれば『とりあえずビール』という習慣が日本には残っていたのでビールの需要だけは健在だった。

その結果、日本人の労働意欲、生産力、共に著しい回復を見せた。しかし、その一方でMOPに依存する日本人の人間的な感情は失われてゆき、ただ黙々とMOPを得る為に労働する、雇用者にとっては非常に都合の良い人間が増えていった。諸外国でも少数の『富を得た者』が多数の『そうでない者』を支配するという経済格差状況があたりまえになっており、その『支配者』は政治の面でも影響力を持つようになって行った。彼らにとって日本製のMOPはまさに『夢のクスリ』であった。MOPは外国に輸出される様になり、日本政府の貴重な収入源にもなった。

スポーツ観戦に興奮する国民も減るばかりで、スポーツ産業は衰退していった。世界規模で人類の体力は低下していたので、サッカーも、野球も、ほとんどのスポーツはネット上の『仮想現実空間』で行われるモノに姿を変えて行った。4年に一度のオリンピックもネット上で行われる様になった。当時のIOC会長、タマランチョ氏(60歳)はこう語る「『還暦』と『缶蹴り』って、なんか似てるよねえ。」

その一方で、日本の秋葉原だけはMOPを含む『ドラッグ汚染』から隔離されていた。なぜならば、そこに集まる人々はドラッグに頼らずとも『愉快的世界に一時的に逃避する』術を心得ていたからである。喫茶だけではなく、『銀行、生命保険、道路工事』など、あらゆる状況において『メイド衣装』に身を包んだ女性を見ることができた。男性従業員は『王子様』、或は『戦国武将』みたいなかっこうで『ロボット白馬』に乗って移動していた。交番の警察官よりは『映画STAR WARS』の『ストームトルーパー』のかっこうをした自警団が活躍していた。彼らは『ルーカスフィルム』から正式な許可を得た『マニア』の団体であった。彼らの武器は秋葉原のジャンク屋で極秘に開発された『NASAも真っ青』の光線銃であった。

しかし、『あたりまえ』に反抗する人々は『常に』いたのであった。『ロッカー』である。あの『駅』とかにある荷物を一時的に閉まっておく『箱』ではなく、『ロックミュージック』を自己表現の手段として選んだ者達である。かつては『ドラッグ文化』の恩恵を『善くも悪くも』受けたロックミュージックとロックミュージシャンであったが、その関係が逆転し、国家権力に逆らうために『反ドラッグ』ロックがちらほらと姿を現し始めた。しかも、売れる前の彼らは貧乏だったので、音楽に集中しようとした者ほど価格が高騰したドラッグに手を出す余裕が無かったのだ。大きな会社に勤めることもなかったのでMOPに汚染されることもなかった。

しかし、やはり日本では『少数派表現者』というものは『ごく一部』の若者にしか支持されず、その中のバンドの一つ『Sounds Cocktail』はしかたなく海外市場を模索。するとアメリカ、イギリス、オランダなどで『バカウケ』であった。なぜなら、それらの国々のドラッグ文化は日本の遙か先を進んでいたのだ。『合成麻薬MOP』に対するヒューマニズム的な観点からの疑問、批判が沸き上がっていたのだ。『Sounds Cocktail』の自力の欧米ツアーは（『収益』以外は）大成功に終わった。音楽的には日本の『1980-1990年代』的な音楽であったが、逆にそれが新鮮だった。そのとたん、日本のメディアやレコード会社は手のひらを返し、『アメリカ、イギリスでも高い評価』という肩書きを武器にして『反ドラッグ』ロックのビジネス化を開始。盲目的にその流れに乗り遅れまいとする多くの日本国民。多数の『反ドラッグ』アーティストが誕生したが、多くは人気目当ての『仮面ドラッグ依存者』だったので、影で『いろいろ服用』していた様である。音楽の質も低かったが、『流行もの好き』の国民には質は関係無かった。

とりあえず、しばらくすると『ドラッグ』はもう『時代遅れ』という時代になった。政府の配布する『MOP』も批判の対象になり、国内のドラッグ関連施設はすべて『ええじゃないか』と叫ぶ市民によって破壊された。多くの失業者が出た。

その元祖・反ドラッグバンド『Sounds Cocktail』であったが、彼らは『方向性の違い』という『ありがちな理由』で人気絶頂の中、『再結成を前提とした』解散。『未発表音源』もたくさんデジタル化されて小学校の校舎の裏に埋められた。

2xxx年。『国営』だった『リハビリ施設』は未だに『満員御礼』状態で、次の選挙で頭がいっぱいになった政府はその『リハビリ施設』を『完全民営化』し(その法案は記録的な速さで可決)、運営、責任、その他もろもろを民間企業に丸投げしていた。民営化したとたん、これまでの政府による『杜撰な運営、不透明な資金利用』が明らかになり、与党が大打撃を受けた。野党は『ヤジ』と『紙テープ』をとばす練習にさらに力を入れた。

そんな流れの中で、日本国内のドラッグ依存者の為のリハビリセンターの頂点に立つ男、元精神科医の『ドン・多古守(たこす)』が、中毒患者の間でほとんど『教祖』と化しており、調子に乗った彼は『国家転覆』の計画を始め、己の『理想郷』を実現するために信者を集めたり、資金を集めたり、世界中のワインのコルク栓を集めたり、何やら良からぬ行動を開始していた。ドラッグで心がボロボロになった者ほど『洗脳』しやすい人間はいなかった。

その『ドン・多古守』であるが、彼は調子に乗りすぎちゃったので、自ら『予言者・ノストラタコス』と名乗り『2999年、7月、空から豆腐の大王が、なんたらかたら、、、』と『末法思想的な予言』を世間に説き、さらに自ら『救世主』として名乗り出た。関連書籍も多数出版（購入者の9割は洗脳された信者）。深夜ラジオにも出演した。一部の虚無主義者を除き、国民はパニック状態になったが、、、結局、何も起こらず。で、2009年8月以降、『ドン・多古守』は『世紀末覇者』を名乗ろうとしたが、世界中の『なんとかの拳』のファンから猛抗議を受けた。彼のブログも炎上。彼の家も『猫避けのペットボトル』が原因で炎上。彼の信者も『なんだか飽きちゃった』ので洗浄。心を。

中東では第7次中東戦争が勃発。NATOは解散。台湾とチベットが正式に独立。300x年。日本。一応、政府主導で『反ドラッグ』政策が『ずいぶん久しぶり』に勧められていた。ドラッグ依存者による阿呆な犯罪は『metalliなんとか』の『fight fire withなんとか』並の速度で減っていった。スポーツ産業もダイエットブームに同調して少しずつ復興を始めた。

しかし、過去に日本の政治で一時代を気付いた男、『大麻生』が漫画家として残した隠れた名作『ツルモグどらっぐ診療』（全11巻）が一部の若者の間で話題になり始めていた。そして、その影響を受けて、いろいろ世代交代を経て、新世代の『ロッカー』達は国家権力に逆らう為に再び、闇で流通していた『ドラッグ』に手を出し始めていた。再び『アートにドラッグは必要悪』などと『勘違いしちゃった』人々がちらほらと出てきた。そしてドラッグ依存者とドラッグの売人による凶悪犯罪が再び増加、、、したかどうかは神のみぞ知る。日本の人口はちょうど666万人であった。

時の日本首相、座比（ザビ）は違法ドラッグ依存者により買ったばかりのケーキ（結婚記念日専用、デコレーションケーキ）を『めっちゃくちゃ』にされたが、『責任能力がどーしたこーした』と説く『人権屋』のおかげで犯人を罪に問う事ができず、腹立たしさのあまり、テレビカメラの前でこう叫んだ。

「敢えて言おう、カスであると!!!!」



